

与謝野晶子訳

源氏物語 野分卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

野分

紫式部

與謝野晶子訳

けざやかにめでたき人ぞ在<sup>い</sup>ましたる野

分が開<sup>あ</sup>くる絵巻のおくに  
(晶子)

中宮<sup>ちゅうぐう</sup>のお住居<sup>すまい</sup>の庭へ植えられた秋草は、今年<sup>ことし</sup>はことさら種類<sup>しゅるい</sup>が多<sup>おほく</sup>くて、その中へ風流な黒木、赤木のませ垣<sup>がき</sup>が所々に結<sup>ゆ</sup>われ、朝

露夕露の置き渡すころの優美な野の景色けしきを見ては、春の山も忘れるほどにおもしろかった。春秋の優劣を論じる人は昔から秋をよいとするほうの数が多いのであったが、六条院の春の庭のながめに説を変えた人々はまたこのごろでは秋の讃美者さんびになっていた、世の中というもののように。

中宮はこれにお心が惹ひかれてずっと御実家生活を続けておいでになるのであるが、音楽の会の催しがあつてよいわけではあつても、八月は父君の前皇太子の御忌月おんきづきであつたから、それにはばかつてお暮らしになるうちにますます草の花は盛りになった。今年の野分のわきの風は例年よりも強い勢いで空の色も変わるほどに吹き

出した。草花のしおれるのを見てはそれほど自然に対する愛のあ  
るでもない浅はかな人さえも心が痛むのであるから、まして露  
の吹き散らされて無惨むざんに乱れていく秋草を御覧になる宮は御病氣  
にもおなりにならぬかと思われるほどの御心配をあそばされた。  
おおうばかりの袖そでというものは春の桜によりも実際は秋空の前に  
必要なものかと思われた。日が暮れてゆくにしたがってしいたげ  
られる草木の影は見えずに、風の音ばかりのつってくるのも恐  
ろしかったが、格子なども皆おろしてしまったので宮はただ草の  
花を哀れに思いになるよりほかしかたもおありにならなかつ  
た。

南の御殿のほうも前の庭を修理させた直後であつたから、この野分にもとあらの小萩こはぎが奔放に枝を振り乱すのを傍観しているよりほかはなかつた。枝が折られて露の宿ともなれないふうの秋草を女王にょおうは縁の近くに出てながめていた。源氏は小姫君の所にいたころであつたが、中將が来て東の渡殿わたどのの衝立ついたての上から妻戸の開いた中を何心もなく見ると女房がおおぜいいた。中將は立ちどまつて音をさせぬようにしてのぞいていた。屏風びょうぶなども風のはげしいために皆畳み寄せてあつたから、ずっと先のほうもよく見えるのであるが、その縁付きの座敷にいる一女性が中將の目にはいつた。女房たちと混同して見える姿ではない。気高けだかくてきれいで、

さつと匂いにおの立つ気がして、春の曙あけぼのの霞かすみの中から美しい樺桜かばざくらの咲き乱れたのを見いだしたような気がした。夢中になってながめる者の顔にまで愛嬌あいきょうが反映するほどである。かつて見たことのない麗人である。御簾みすの吹き上げられるのを、女房たちがおさえ歩くのを見ながら、どうしたのかその人が笑った。非常に美しかった。草花に同情して奥へもはいらずに紫の女王がいたのである。女房もきれいな人ばかりがいるようであつても、そんなほうへは目に移らない。父の大臣が自分に接近する機会を与えないのは、こんなふうびぼうに男性が見ては平静でありえなくなる美貌の継母と自分を、聡明そうめいな父は隔離するようにして親しませなかったのであつ

たと思うと、中將は自身の隙見すきみの罪が恐ろしくなつて、立ち去ろうとする時に、源氏は西側の襖子ふすまをあけて夫人の居間へはいつて来た。

「いやな日だ。あわただしい風だね、格子を皆おろしてしまうがよい、男の用人がこの辺にもいるだろうから、用心をしなければ」

と源氏が言っているのを聞いて、中將はまた元の場所へ寄つてのぞいた。女王は何かものを言っていて源氏も微笑しながらその顔を見ていた。親という気がせぬほど源氏は若くきれいで、美しい男の盛りのように見えた。女の美もまた完成の域に達した時で



あろうと、身にしむほどに中將は思ったが、この東側の格子も風に吹き散らされて、立っている所が中から見えそうになったのに、恐れて身を退<sup>の</sup>けてしまった。そして今来たように咳<sup>せき</sup>払いなどをしながら南の縁のほうへ歩いて出た。

「だから私が言ったように不用心だったのだ」

こう言った源氏がはじめて東の妻戸のあいていたことを見つけた。長い年月の間こうした機会がとらえられなかったのであるが、風は巖<sup>いわ</sup>も動かすという言葉に真理がある、慎み深い貴女<sup>きじょ</sup>も風のために端へ出ておられて、自分に珍しい喜びを与えたのであると中將は思ったのであった。家司<sup>けいし</sup>たちが出て来て、

「たいへんな風力でございます。北東から来るのでございますから、こちらはいくぶんよろしいわけでございます。馬場殿と南の釣殿つりどのなどは危険に思われます」

などと主人に報告して、下人げにんにはいろいろな命令を下していった。

「中将はどこから来たか」

「三条の宮にいたのでございますが、風が強くなりそうだと人が申すものですから、心配でこちらへ出て参りました。あちらではお一方ひとかたきりなのですから心細こまそうになさいますて、風の音なども若い子のように恐ろしがっていられますからお気の毒に存じまし

て、またあちらへ参ろうと思います」

と中将は言った。

「ほんとうにそうだ。早く行くがいいね。年がたって若い子になるということは不思議なようでも実は皆そうなのだね」

と源氏は大宮に御同情していた。

騒がしい天気でございますから、いかがとお案じしておりますが、この朝臣<sup>あそん</sup>がお付きしておりますことで安心してお伺いはいたしません。

という挨拶<sup>あいさつ</sup>を言づてた。途中も吹きまくる風があつて侘<sup>わび</sup>しいのであつたが、まじめな公子であつたから、三条の宮の祖母君と、

六条院の父君への御機嫌きげん伺いを欠くことはなくて、宮中の御謹慎日などで、御所から外へ出られぬ時以外は、役所の用の多い時にも臨時の御用の忙しい時にも、最初に六条院の父君の前へ出て、三条の宮から御所へ出勤することを規則正しくしている人で、こんな悪天候の中へ身を呈するようなお見舞いなども苦勞とせずにした。宮様は中將が来たので力を得たようにお喜びになった。

「年寄りの私がまだこれまで経験しないほどの野分ですよ」

とふるえておいでになった。大木の枝の折れる音などもすごかった。家々の瓦の飛ぶ中かわらを来たのは冒険であったとも宮は言うておいでになった。はなやかな御生活をあそばされたことも皆過

去のことになって、この人一人をたよりにしておいでのなる御現  
状を拝見しては無常も感ぜられるのである。今でも世間から受け  
ておいでになる尊敬が薄らいだわけではないが、かえってお一人  
子の内大臣のとり態度にあたたかさの欠けたところがあつた。

夜通し吹き続ける風に眠りえない中将は、物哀れな気持ちに  
なっていた。今日は恋人のことが思われずに、風の中でした隙見<sup>すきみ</sup>  
ではじめて知るを得た継母の女王の面影が忘られないのであつ  
た。これはどうしたことが、だいそれた罪を心で犯すことになる  
のではないかと思つて反省しようとしてつとめるのであつたが、また  
同じ幻が目に見えた。過去にも未来にもないような美貌<sup>びぼう</sup>の方であ

る、あれほどの夫人のおられる中へ東の夫人が混じっておられるなどということは想像もできないことである。東の夫人がかわいそうであるとも中将は思った。父の大臣のりっぱな性格がそれによつて証明された気もされる。まじめな中将は紫の女王を恋の対象として考えるようなことはしないのであるが、自分もああした妻がほしい、短い人生もああした人といっしょにいれば長生きができるであらうなどと思い続けていた。

明け方に風が少し湿気を帯びた重い音になつて村雨風むらさめな雨になつた。

「六条院では離れた建築物が皆倒れそうでございます」

などと侍が報じた。風が揉み抜いている間、広い六条院は大臣の住居<sup>すまい</sup>辺はおおぜいの人<sup>はな</sup>が詰めているであろうが、東の町など人少なで花散里<sup>はなちるさと</sup>夫人は心細く思ったことであろうと中将は驚いて、まだほのぼの白<sup>しろ</sup>むころに三条の宮から訪<sup>たず</sup>ねに出かけた。横雨が冷ややかに車へ吹き込んで来て、空の色もすごい道を行きながらも中将は、魂が何となく身に添わぬ気がした。これはどうしたこと、また自分には物思いが一つふえることになったのかと慄然<sup>りっぜん</sup>とした。これほどあるまじいことはない、自分は狂気したのかともいろいろに苦しんで六条院へ着いた中将は、すぐに東の夫人を見舞いに行った。非常におびえていた花散里をいろいろと慰めて

から、家司けいしを呼んで損ねた所々の修繕を命じて、それから南の町へ行つた。まだ格子は上げられずに人も起きていなかったのも、中将は源氏の寢室の前にあたる高欄によりかかつて庭をながめていた。風のあとの築山つきやまの木が被害を受けて枝などもたくさん折れていた。草むらの乱れたことはむろんで、檜皮ひわだとか瓦かわらとかが飛び散り、立部たてじとみとか透垣すきがきとかが無数に倒れていた。わずかだけさした日光に恨み顔な草の露がきらきらと光っていた。空はすごく曇つて、霧におおわれているのである。こんな景色けしきに対していて中将は何ということなしに涙のこぼれるのを押し込むように拭ふいて咳せき払いをしてみた。



「中將が来ているらしい。まだ早いだろうに」

と言って源氏は起き出すのであった。何か夫人が言っているらしいが、その声は聞こえないで源氏の笑うのが聞こえた。

「昔もあなたに経験させたことのない夜明けの別れを、今はじめて知って寂しいでしょう」

と言っているのが感じよく聞こえた。女王の言葉は聞こえないのであるが、一方の言葉から推して、こうした戯れを言い合う今も緊張した間柄であることが中將にわかった。格子を源氏が手ずからあけるのを見て、あまり近くいることを遠慮して、中將は少し後へ退いた。

「どうだったか、昨晚伺ったことで宮様はお喜びになったかね」  
「そうでございました。何でもないことにもお泣きになりますからお気の毒で」

と中將が言うと言源氏は笑って、

「もう長くはいらっしゃらないだろう。誠意をこめてお仕えしておくがいい。内大臣はそんなふうでないと私へおこぼしになったことがある。華美なきらきらしいことが好きで、親への孝行も人目を驚かすようにしたい人なのだね。情味を持ってどうしておあげしようというようなことのできない人なのだよ。複雑な性格で、非常な聡明<sup>そうめい</sup>さで末世の大臣に過ぎた力量のある人だがね。ま

あそう言えばだれにだって欠点はあるからね」

などと源氏は言うのであった。

「あの大風に中宮付きちゆうぐんつきの役人は皆出て来ていたか、昨夜ゆうべのことが不安だ」

と言って、源氏は中將を見舞いに出すのであった。

昨晚の風のきついころはどうしておいでのになりましたか。私は少しそのころから身体からだの調子がよろしゅうございませんのでただ今はまだ伺われません。

という挨拶あいさつを持たせてやったのである。そこを立ち廊の戸を通って中宮の町へ出て行く若い中將の朝の姿が美しかった。東の

対の南側の縁に立って、中央の寢殿を見ると、格子が二間ほどだけ上げられて、まだほのかな朝ぼらけに御簾みすを巻き上げて女房たちが出ていた。高欄によりかかって庭を見ているのは若い女房ばかりであつた。打ち解けた姿でこうしたふうに出ていたりするとはよろしくなくても、これは皆きれいにいろいろな上着に裳もまでつけて、重なるようにしてすわりながらおおぜいで出ているのを感じのよいことであつた。中宮は童女を庭へおろして虫籠むしかごに露を入れさせておいでになるのである。紫※しおん色、撫子色なでしこなどの濃い色、淡い色の裯あこめに、女郎花色おみなえしの薄物の上着などの時節に合つた物を着て、四、五人くらいずつ一かたまりになつてあなたこなたの

草むらへいろいろな籠を持って行き歩いていて、折れた撫子の哀れな枝なども取って来る。霧の中にそれらが見えるのである。お座敷の中を通って吹いて来る風は侍従香の匂いを含んでいた。貴女よの世界の心憎さが豊かに覚えられるお住居すまいである。驚かすような気がして中将は出にくかったが、静かな音をたてて歩いて行くと、女房たちはきわだって驚いたふうも見せずに皆座敷の中へはいつてしまった。宮の御入内ごじゆだいの時に童形どうぎやうで供奉ぐぶして以来知り合いの女房が多くて中将には親しみのある場所でもあった。源氏の挨拶さつを申し上げてから、宰相の君、内侍ないしなどもいるのを知って中将はしばらく話していた。ここにはまたすべての所よりも気高い空けだか

気があつた。そうした清い気分の中で女房たちと語りながらも中将は昨日<sup>きのう</sup>以来の悩ましさを忘れることができなかった。

帰つて来ると南御殿は格子が皆上げられてあつて、夫人は昨夜<sup>ゆうべ</sup>気にかけながら寝た草花が所在も知れぬように乱れてしまったのをながめている時であつた。中将は階段の所へ行つて、中宮のお返辞を報じた。

荒い風もお防ぎくださいますでしょうと若々しく頼みにさせていただいているのでございますから、お見舞いをいただきましてはじめて安心いたしました。

というのである。

「弱々しい宮様なのだからね、そうだったろうね。女はだれも皆こわくてたまるまいという気のした夜だったからね、実際不親切に思召おぼしめしただろう」

と言って、源氏はすぐに御訪問をすることにした。直衣のうしなどを着るために向こうの室の御簾みすを引き上げて源氏がいる時に、短い几帳きちょうを近くへ寄せて立てた人の袖口そでぐちの見たのを、女王にょおうであるうと思うと胸が湧わき上がるような音をたてた。困ったことであると思って中将はわざと外のほうをながめていた。源氏は鏡に向かいながら小声で夫人に言う、

「中将の朝の姿はきれいじゃありませんか、まだ小さいのだが洗

練されても見えるように思うのは親だからかしら」

鏡にある自分の顔はしかも最高の優越した美を持つものであると源氏は自信していた。身なりを整えるのに苦心をしたあとで、

「中宮にお目にかかる時はいつも晴れがましい気がする。なんらの見識を表へ出しておいでのになるのでないが、前へ出る者は気がつかわれる。おおように女らしくて、そして高い批評眼が備わっているというようなかただ」

こう言いながら源氏は御簾から出ようとしたが、中將が一方を見つめて源氏の来ることにも気のつかぬふうであるのを、鋭敏な神経を持つ源氏はそれをどう見たか引き返して来て夫人に、



「昨日風の紛れに中將はあなたを見たのじゃないだろうか。戸が  
あいていたでしょう」

と言うと女王は顔を赤くして、

「そんなこと。渡殿わたどののほうには人の足音がしませんでしたもの」  
と言っていた。

「しかし、疑わしい」

源氏はこう独言ひとりごとを言いながら中宮の御殿のほうへ歩いて行っ  
た。また供をして行った中將は、源氏が御簾みすの中へはいつている  
間を、渡殿の戸口の、女房たちの集まっているけはいのうかがわ  
れる所へ行つて、戯れを言ったりしながらも、新しい物思いで

きた人は平生よりもめいっただふうをしていた。

そこからすぐに北へ通って明石<sup>あかし</sup>の君の町へ源氏は出たが、ここでははかばかしい家司<sup>けいし</sup>風の者は来ていないで、下仕えの女中などが乱れた草の庭へ出て花の始末などをしていた。童女<sup>りんだう</sup>が感じのいい姿をして夫人の愛している竜胆<sup>りんどう</sup>や朝顔がほかの葉の中に混じってしまったのを選<sup>え</sup>り出していたわっていた。物哀れな気持ちになっについて明石は十三絃<sup>げん</sup>の琴を弾<sup>ひ</sup>きながら縁に近い所へ出ていたが、人払いの聲がしたので、平常着<sup>ふだんぎ</sup>の上へ棹<sup>さお</sup>からおろした小桂<sup>こうちぎ</sup>を掛けて出迎えた。こんな急な場合にも敬意を表することを忘れない所にこの人の性格が見えるのである。座敷の端にしばらくす

わって、風の見舞いだけを言って、そのまま冷淡に帰って行く源氏の態度を女は恨めしく思った。

おほかたの荻の葉過ぐる風の音もうき身一つに沁むこころして

こんなことを口ずさんでいた。

源氏が東の町の西の対へ行った時は、夜の風が恐ろしくて明け方まで眠れなくて、やっと睡眠したあとの寝過ぎをした玉鬘が鏡を見ている時であった。たいそうに先払いの声を出さないよう

にと源氏は注意していて、そつと座敷へはいった。屏風<sup>びょうぶ</sup>なども皆畳んであつて混雑した室内へはなやかな秋の日ざしがはいった所に、あざやかな美貌<sup>びぼう</sup>の玉鬘<sup>たまかづり</sup>がすわっていた。源氏は近い所へ席を定めた。荒い野分の風もここでは恋を告げる方便に使われるのであつた。

「そんなふうなことを言つて、私をお困らせになりますから、私はあの風に吹かれて行つてしまいたく思いました」

と機嫌<sup>きげん</sup>をそこねて玉鬘が言つと源氏はおもしろそうに笑つた。

「風に吹かれてどこへでも行つてしまおうというのは少し軽々しいことですね。しかしどこか吹かれて行きたい目的の所があるので

しよう。あなたも自我を現わすようになって、私を愛しないことも明らかにするようになりましたね。もったもですよ」

と源氏が言うと、玉鬘は思ったままを誤解されやすい言葉で言ったものであると自身ながらおかしくなって笑っている顔の色がはなやかに見えた。海酸漿うみほおずきのようにふっくらとしていて、髪の間から見える膚の色がきれいである。目があまりに大きいことだけはそれほど品のよいものでなかった。そのほかには少しの欠点もない。中將は父の源氏がゆっくりと話している間に、この異腹の姉の顔を一度のぞいて知りたいとは平生から願っていることであつたから、隅すみの部屋へやの御簾みすが几帳きちようも添えられてあるが、乱れた

ままになっている、その端をそつと上げて見ると、中央の部屋との間に障害になるような物は皆片づけられてあつたからよく見えた。戯れていることは見ていてわかることであつたから、不思議な行為である。親子であつても懷ふところに抱きかかえる幼年者でもない、あんなにしてよいわけのものでないのにと目がとまつた。源氏に見つけられないかと恐ろしいのであつたが、好奇心がつつてなおのぞいてみると、柱のほうへ身体からだを少し隠すように姫君がしているのを、源氏は自身のほうへ引き寄せていた。髪の毛が寄つて、はらはらとこぼれかかっていた。女も困つたようなふうはしながらも、さすがに柔らかに寄りかかっているのを見ると、

始終このなれなれしい場面の演ぜられていることも中将に合点がてんされた。悪感おかんの覚えられることである、どういうわけであろう、好色なお心であるから、小さい時から手もとで育たなかった娘にはああした心も起こるのであろう、道理でもあるがあさましいと真相を知らない中将にこう思われている源氏は気の毒である。玉鬘は兄弟であつても同腹でない、母が違ふと思えば心の動くこともあろうと思われる美貌であることを中将は知つた。昨日見た女王にょおうよりは劣つて見えるが、見ている者が微笑ほほえまれるようなはなやかさは同じほどに思われた。八重の山吹やまぶきの咲き乱れた盛りに露を帯びて夕映ゆうばえのもとにあつたことを、その人を見ていて中将は思い

出した。このごろの季節のものではないが、やはりその花に最もよく似た人であると思われた。花は美しくても花であって、またよく乱れた蕊しべなども盛りの花といっしょにあったりなどするものであるが、人の美貌はそんなものではないのである。だれも女房がそばへ出て来ない間、親しいふうに二人の男女は語っていたが、どうしたのかまじめな顔をして源氏が立ち上がった。玉鬢が、

吹き乱る風のけしきにをみなへししを女郎花萎れしぬべきここちこそすれ



と言った。これはその人の言うのが中将に聞こえたのではなくて、源氏が口にした時に知ったのである。不快なことがまた好奇心を引きもして、もう少し見きわめたいと中将は思ったが、近くにいたことを見られまいとしてそこから退<sup>の</sup>いていた。源氏が、

「しら露に靡<sup>なび</sup>かましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし

弱竹<sup>なよたけ</sup>をお手本になさい」

と言ったと思ったのは、中将の僻耳<sup>ひがみみ</sup>であつたかもしれぬが、それも気持ちの悪い会話だとその人は聞いたのであつた。

はなちるさと

花散里の所へそこからすぐに源氏は行つた。今朝けさの肌寒はださに促されたように、年を取った女房たちが裁ち物などを夫人の座敷でしていた。細櫃ほそびつの上で真綿をひろげている若い女房もあつた。きれいに染め上がった朽ち葉色の薄物、淡紫うすむらさきのでき上がりのよい打ち絹などが散らかっている。

「なんですこれは、中将の下襲したかさねなんですか。御所の壺前つぼせんざい裁の秋草の宴なども今年はだめになるでしょうね。こんなに風が吹き出してしまつてはね、見ることも何もできるものでないから。ひどい秋ですね」

などと言いながら、何になるのかさまざまの染め物織り物の美

しい色が集まっているのを見て、こうした見立ての巧みなことは南の女王にも劣っていない人であると源氏は花散里を思った。源氏の直衣のうしの材料の支那しなの紋綾もんあやを初秋の草花から摘んで作った染料で手染めに染め上げたのが非常によい色であつた。

「これは中将に着せたらいい色ですね。若い人には似合うでしょう」

こんなことも言つて源氏は歸つて行つた。

面倒めんどうな夫人たちの訪問の供を皆してまわつて、時のたつたことで中将は気が気でなく思いながら妹の姫君の所へ行つた。

「まだ御寢室にいらっしゃるのでございますよ。風をおこわがり

になって、今朝けさはもうお起きになることもおできにならないので  
ございます」

と、乳母めのとが話した。

「悪い天気でしたからね。こちらで宿直とのいをしてあげたかったのだが、宮様が心細がっていらっしゃったものですからあちらへ行つてしまったのです。お雛様ひなの御殿はほんとうにたいへんだったでしょう」

女房たちは笑って言う、

「扇の風でもたいへんなのでございますからね。それにあの風でございましょう。私どもはどんなに困ったことでしょう」

「何でもない紙がありませんか。それからあなたがたがお使いになる硯すずりを拝借しましょう」

と中將が言ったので女房は棚たなの上から出して紙を一巻き蓋ふたに入  
れて硯といっしょに出してくれた。

「これはあまりよすぎて私の役にはたちにくい」

と言いながらも、中將は姫君の生母が明石夫人あかしであることを  
思つて、遠慮をしすぎる自分を苦笑しながら書いた。それは淡紫  
の薄様うすようであつた。丁寧ていねいに墨をすつて、筆の先をながめながら考  
えて書いている中將の様子は艶えんであつた。しかしその手紙は若い女  
房を羨望せんぼうさせる一女性にあてて書かれるものであつた。

風騒ぎむら雲迷ふ夕べにも忘るるまなく忘れぬ君

という歌の書かれた手紙を、穂の乱れた刈萱かるかやに中將はつけていた。女房が、

「交野かたのの少將は紙の色と同じ色の花を使つたそうでございますよ」

と言つた。

「そんな風流が私にはできないのですからね。送つてやる人だつてまたそんなものなのですからね」

中將はこうした女房にもあまりなれなれしくさせない溝みぞを作つ

て話していた。品のよい貴公子らしい行為である。中將はもう一通書いてから右馬助うまのすけを呼んで渡すと、美しい童侍わらわぎもじや、ものなれた随身の男へさらに右馬助は渡して使いは出て行つた。若い女房たちは使いの行く先と手紙の内容とを知りたがっていた。姫君がこちらへ来ると言つて、女房たちがにわか立ち騒いで、几帳きちようの切れを引き直したりなどしていた。昨日から今朝にかけて見た麗人たちと比べて見ようとする氣になつて、平生はあまり興味を持たないことであつたが、妻戸みすの御簾すへ身体からだを半分入れて几帳ほころの綻びからのぞいた時に、姫君がこの座敷へはいつて来るのを見た。女房が前を往ゆき来するので正確には見えない。淡紫の着物を着て、

髪はまだ着物の裾すそには達せず、末のほうがわざとひろげたようになっっている細い小さい姿が可憐かれんに思われた。一昨年ごろまでは稀まれに顔も見たのであるが、そのころよりはまたずっと美しくなったようである。と中将は思った。まして妙齡になったならどれほどの美人になるであろうと思われた。さきに中将の見た麗人の二人を桜と山吹にたとえるなら、これは藤ふじの花といってよいようである。高い木にかかって咲いた藤が風になびく美しさはこんなものであると思われた。こうした人たちを見たいだけ見て暮らしたい、継母であり、異母姉妹であれば、そののできないのがかえって不自然なわけであるが、事実はそのうした恨めしいものになって



いると思うと、まじめなこの人も魂がどこかへあこがれて行ってしまう気がした。

三条の宮へ行くと宮は静かに仏勤めをしておいでになった。若い美しい女房はここにもいるが、身なりも取りなしも盛りの家の夫人たちに使われている人たちに比べると見劣りがされた。顔だちのよい尼女房の墨染めを着たのなどはかえってこうした場所にふさわしい気がして感じよく思われた。内大臣も宮を御訪問に来て、灯<sup>ひ</sup>などをともしてゆつくりと宮は話しておいでになった。

「姫君に長く逢<sup>あ</sup>いませんね。ほんとうにどうしたことだろう」とお言い出しになって、宮はお泣きになった。

「近いうちにお伺わせいたします。自身から物思いをする人になつて、哀れに衰えております。女の子というものは実際持たなくていいものですね。何につけかにつけ親の苦勞の絶えないものです」

内大臣はまだあの古い過失について許し切っていないように言うのを、宮は悲しくお思ひになつて、望んでおいでになることは口へお出しになれなかった。話の続きに大臣は、

「ものにならない娘が一人出て来まして困っております」と母宮に訴えた。

「どうしてでしょう。娘という名がある以上おとなしくないわけ

はないものですが」

「それがそういかないのです。醜態でございます。お笑いぐさにお目にかきたいほどです」

と大臣は言っていた。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気づきの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---